



Title	ウンム・クルスーム : ウンマのなかの音
Author(s)	水野, 信男
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44507
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	水野信男
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第18001号
学位授与年月日	平成15年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	ウンム・クルスーム ―ウンマのなかの音―
論文審査委員	(主査) 教授 山口 修
	(副査) 教授 根岸 一美 助教授 永田 靖

論文内容の要旨

本論文は、近代エジプトの大歌手ウンム・クルスーム(1904?–1975)に焦点をあてつつ西アジア音楽の民俗的伝統と古典を論ずるものである。副題にあるアラビア語「ウンマ」は、一般には「共同体」をさすが、「イスラーム共同体」「イスラーム世界」という意味も含まれる。さらにこの論文の文脈からは、「共同体としてのエジプト国民全体」と解釈できる。つまりこの副題は、「ウンム・クルスームの歌が、イスラーム世界のなかに息づく音楽である」ことを示唆している。他界した後、四半世紀をすぎたいまなおアラブ世界のいたるところで愛されつづけているウンム・クルスームの歌は、長い伝統をもつウンマのなかに生成した音であり、なおかつその歌がアラブ・イスラーム音楽の本質をそなえているのである。

論文は、短い序章と終章に挟まれた全3章からなり、付録がついている。第一章「アラブ・イスラーム音楽について」では、西アジアと北アフリカ全域にまたがるイスラーム世界が育んできた音楽の歴史と現在を概観する。アラブの古典音楽と近代音楽の場合、アラブ人のおもな居住地域をはるかにこえて、西アジアのイスラーム圏、すなわち、イランやトルコ、ときには中央アジアまでもまきこんで展開してきたし、イスラームの宗教音楽やアラブのフォークロアも深く関わっている。こうした状況が複合的に絡み合いながら本論文の主たる対象たるウンム・クルスームの音楽世界が形成されたのである。第二章以降は、そのウンム・クルスームに焦点をあてる。

第二章「ウンム・クルスームの歌について」では、ふるい伝統をたずさえたアラブ・イスラーム音楽が、占領と植民地化という過酷な状況下の20世紀エジプトでしたたかにうまれかわっていった様子を記述したうえで、そのようなときに忽然と出現した不世出の音楽家ウンム・クルスームの生涯をおいつつ、彼女の全レパートリーの特色を抽出する。具体的には、カイロ方言による現代詩にまじって、カスィーダという、遊牧時代からはぐくまれた正則アラビア語による長詩が断続的にうたわれていること、また、彼女がこのカスィーダに回帰することを通してたえず自身のアイデンティティを確かめ、自身とイスラームとの一体化を指向しつづけたことを指摘する。

第三章「ウンム・クルスームの歌のかたち」では、その解明手段として「インターアーツ」すなわち、音楽、絵画、建築、詩、文学など、諸芸術のあいだにある共通性や類似性を探りつつ新しい視角を構築する手法をとる。具体的には、装飾図形のアラベスクと音楽を比較し、「アラベスク」がアラブ・イスラームの文化的性格の一面を如実に表現していることを詳細に論じる。すなわちアラベスクには、性格面では、抽象性、無限性、反復性、非個性性など、形式面では、非展開性、非即興性、対称性、クライマックスやカデンツの欠落などの特質がみられ、さらに技術面では、進行法、接合法、区分法、弛緩法などに、きわだった特殊な描き方がみられるのである。これらのアラベスクの特質

をウンム・クルスームの歌のかたちにあてはめて考察するために、晩年の歌から傑作のほまれたかい3曲を楽曲分析の対象としてとりあげ、彼女の歌に代表されるアラブ近代音楽がまさに「音楽のアラベスク」とよべる内容をやどしていることを実証する。

(分量 本文 141 頁 400 字詰原稿用紙換算約 420 枚 付録、参考文献、日英長短要旨等 70 頁)

論文審査の結果の要旨

本来、イスラームは音楽を教義のうえでは禁止しているにもかかわらず、現実のアラブ世界の人びとは他の諸民族に優るとも劣らない音楽性をもっていることが本論文によって明らかにされている。長年にわたって西アジアを足繁く探訪した著者がこれまで公表してきた一連の業績とはまた一味異なる成果をここに見ることができる。すなわち、音楽学一般でいまや当然のこととされるポピュラー音楽への本格的な接近が実を結んでいるのである。もともと、欧米や東アジア・東南アジアでのポピュラー音楽の世界とは一線を画する西アジアの例をあつかっているだけに「ポピュラー音楽」という切り口が人類に普遍的に通用する概念であるとはかぎらないことが本論文により証明されたと言っても過言ではない。また、一人の音楽家に焦点をしぼることがその音楽家を生んだ音楽文化や歴史的背景を語ることにつながっている点で興味深い事例研究である。さらに、付録に反映されているように、本論を展開するうえで必要であった膨大な量の資料収集とその整理の方法がデータベース化の試みとして提示されていることも高く評価できる。

本論文の問題点を挙げるとすれば、著者が西アジア以外の音楽文化と比較することなく対象を分析しているために、ある意味では普遍的に抽出できる文化特性までアラブ的なものに含めてしまっていることである。しかし、その反省にたつ近未来の研究計画へのつながりを提示しているので、細部での修正がなされる日は近いものと予想され、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうことはない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。